

文五郎一代

梁
雅子



香

一代部五更

梁 雅子



朝日新聞社

文五郎一代

七八〇円

昭和四十五年九月二十日第一刷発行

著者 梁 雅 子

発行者 大 田 信 男

印刷所 内 外 印 刷

発行所 朝 日 新 聞 社

東京 名古屋 大阪 北九州

製本 古川製本

文五郎一代

装帧·插画

梁
香保里

第一章

半月が出ていた。明治十六年三月初旬の夜中の二時は寒く冷たく、巳之助は母にもらったお高祖頭巾をかぶって歩きながら思い出し笑いをした。頭巾の下は丁稚奉公で転々とした時から着たままのみのじんの木綿縞の筒袖、その着物を尻からげして、うす汚れた白い股引に黒足袋の足は薄い雪駄をはいている。

「よおこらえてくれるな、えらいやろけど辛抱しいや。行っというで……」

軒下に立って見送ってくれる母の声も、もう涙のにじむような声ではなくなった。「そらそや」と十五歳の巳之助は思う、「もうひと月も続いてんのやさかいにな……」

巳之助は十歳の時から奉公に出されて五日と勤まらず暇を出されてきた。八百屋、お茶舗、大工

の相かた、だんじりの金具磨き、傘の骨直し、饅頭屋^{まんじゅう}の丁稚、手拭屋の丁稚、染物屋の丁稚……、あとは忘れてしまうほど、母が数えているのをきくとおよそ三十軒程行っている。どれも遊び盛りのこどもの巳之助には辛く面白くなく、染物屋では誂え主の注文をとりちがえたり、洗張りの着物の片袖を落してきたり、大工仕事の屋根直しでは瓦を十枚程落して親方を憤らせ、屋根からつき落されて腰を痛め、すぐ追返された。それでも奉公にゆくのは嫌とはいえなかった。父と母と自分と三人暮しの一家が自分を食べさせるだけの余裕もないほど貧乏のどん底にあるのが次第にわかってきたからである。

父は河村清五郎、母はみね。もと道頓堀のひとすじ東の通りの疊屋町に住み、屋号は「河清」といって質屋と炭屋を営んでいたのである。その頃の事を母は呪文のようによく言う。

「この河村の家はな、昔からの貧乏やない、文明開化とかいう世の中のために貧乏したんや。明治の御維新で世の中が変ってしもて……。おとなしいお父さんはどないも出来^{でき}へんようになりはったんや。おぼえているやろ、あんたのちっちゃいときは女中^{おなごし}がいてご飯食べさせたやろ、わてかて結構な御寮人^{ごりょうじん}さんやった」

「フン、そやそや、心齋橋の疊屋町の家でか」

巳之助は明治二年十月二十日に、大阪心齋橋筋の東側の通りの疊屋町に生れた。この界隈は江戸時代から島之内と呼ばれていて、明治、大正になっても派手な処であった。

「浪花の色里、新町の廓に劣らぬ妓館多く、また道頓堀をへだてて歌舞伎、あやつりの劇場ありて、ただ浮世のうかれどころ」

といわれていて、大阪で南といえは島之内に限られるほどで、湯女や娼妓を唄う屋形の並ぶ町を布袋町と呼んだ。このような土地柄に生れた巳之助の中には、自分は知らぬ艶めいたものが血肉に混っていたのであろうか。

父の清五郎はお人好しで商売にはうとく、家業に失敗して明治十年ごろ店を看板ぐるみ人に譲ってしまったのであった。巳之助九歳の時である。住いも、九条、上福島、難波、千日前、木津、というように転々として、ようやく与力町に落着き、父は松島文楽の表方（事務員のような仕事）になってどうやら平靜な日々を送るようになったのである。しかし父の給料ではまだ足りず、母は一文菓子の屋台車を引いて、せめてはなにかの足しにでもと稼いでいた。

ひとり息子の巳之助はどこへ奉公に出しても勤まらず、もう十五歳にもなって先が案じられると、父はつてを求めてやっと松島文楽の人形遣い玉助師匠の内弟子にしてみらうことに成功した。父親としてはまともな商人になってもらいたかったが、あまりにも奉公先が変り、続かぬので、もうどこでも辛抱さえしてくれたら、と親の方が根負けしてしまったのである。

もっとも人形遣いの弟子になったのはこれが初めてではない。京都の寄席に出ていた吉田玉五郎という人形遣いに巳之助のことを話すと、「そないに難儀してるのならわしのところで使おたらか」と言ってくれて暫く厄介になった。が、それでも、米を買おてこい、と渡された錢を握りしめて巳之助は三十石船に乗って大阪の家に戻って来たのであった。父は激怒して荒縄で縛って天井に吊り下げたこともある。

巳之助はめずらしくひと月続いていた。父が表方にいるので心丈夫であったし、いままでの奉公

先のように、どちらを見ても怖い人ばかりではなかった。気の荒い道具方もやさしくしてくれた。とはいえ、巳之助の修業は楽ではない。文楽は午前五時に幕が開くので、部屋の子は三時には芝居小屋に到着していなくてはならない。天満の与力町から九条の松島遊廊の中にある文楽座までは約一里半はあった。その道を一日二回は歩くのである。

深夜の暗い道は静寂が痛いほど身にもしみ入る。自分の足音や吐く息がおそろしく大きく聞えたり、毛むじらの黒い手がうしろから襟がみをつかまえる幻想におびえたり、最初の十日程は、神さん、仏さん、ナンマンダブツ、ナンマンダブツ、と口ずさんだりしたが、もう慣れた。雨の夜は今でも怖い、月の出ている真夜中の道はなんだか舞台を歩いているようで、ええな、思ったりする。

三月に入って雪の降った夜、

「やっぱりな、三月三日は井伊大老さんが殺されった日やよって雪降るな。これ着ていきなはれ、誰も見てへん」

母が渡してくれたのは古い、黒が茶色になったお高祖頭巾であった。素直に受けとってかぶった心は痛かった。見られる傘は一本しかない。同じ劇場に勤めている父は表方だから巳之助ほど早く家を出ることもないが、その父が持つてゆかねば恰好のつかぬ大切な傘であった。うちにはまともな傘一本しかないのか、という思いを噛みしめて、

「お母はん、どや」

巳之助は頭巾をかぶると、尻からげしていた裾をはずして褌つちをとって見せた。

「まあ、この子……」

やつれた母の顔が雪明りの中で笑ったのだった。「お母はんかて安心しやはったんやな。わてももう十五や、いつまでもお母はんに、一文菓子もんこの車ひかせておくもんか」。巳之助は心の中の母の笑顔を抱きしめながら音もなく降り積る雪の道を歩いたのであった。それ以来、巳之助はお高祖頭巾をかぶることをやめない。

「そんなにかぶって……、人に笑われるがな」

「けど、頭がぬくいんや」

昨夜だった。うす曇りで半月も雲にかくれていて道は暗く、自分の足音だけを聞きながら歩いて、早う玉江橋に出て、少しは明るい雑魚場ざこばの市の焚火にあたらしてもらいたい、と思っていた時、暗い細い辻からヌーと大きな男があらわれた。かなり酔っているらしい男は、巳之助がびっくりしたように、向うも驚いて立止った。

「へへ……、ねえちゃん、こんな夜更に歩いてんのは唯のおなごちがうやろ。どや、ちょっと仲良うしようやないか」

よろよろと寄ってくると酒臭い匂いがした。巳之助は頭巾をかぶっている自分に気づいた。巳之助はおかしくなりながら、さっと頭巾を脱いで舌を出した。男は半月の明りですかさうに見えていたが、突然夜鳥のような叫び声をあげて逃げて行った。酔っている足をひきずってゆくその姿がおかしくて、おかしくて巳之助はとうとう声を出して笑った。それを今夜も思い出してまた笑う。

「けど妙なもんやな、このお高祖頭巾ひとつでわてが女に見えるとはな。そや、芝居につれて行かれた時も、あの頭巾かぶったきれいな女の人がいた。もっと幼い時、毎日のように女中おなごに連れてゆかれた心齋橋の見世物小屋にもお高祖頭巾かぶった女の人がいた」と思う。「女のひというもんは、ちょっと隠すと凄味すこみがあるほど奇麗なもんやな。手拭を髪にかけたかて味があるな。おんなの人はええな……」

堂島川の川ぶちを巳之助は歩く。黒い水が音もなく流れ、ここに来ると急に寒い。南岸の東には松の木が多く、有名なこの松は大きな枝をたこの足よろしく川に向って伸べていて、その異様な恰好が真夜中のひとり歩きに、ゾツとするような不気味さを送って来る。中之島製紙会社の表を通ると、隣の蔵屋敷跡がこわれかかっているが、門の脇に誰か住んでいるのか、必ず犬が吠える。巳之助は怖いというより、何かホツとするのであった。玉江橋からまっすぐに常安橋を京町堀に出て西へ歩む。雑魚場ざこばの魚市の焚火が見えてくる。近づくと魚の匂いが漂い広い敷石が濡れ光り、焚火の明りを受けて、ねじ鉢巻もまじるたくましい男達が影絵のように見える。

「お早うさん、おっちゃん」

顔見知りの年配の男に巳之助は人なつっこく声をかけると、

「おお早いな、精が出るな。あたっていき」

と言ってくれる。巳之助はもう先刻から頭巾をとってふところに入れていた。魚臭い男達に囲まれて巳之助は足もとからぬくもってゆく快さに息をつく。

「よお見かけるけど、あんた一体どこへ通おてるねん」

「精が出るな」といつてくれた初老の男がたずねた。

「へえ、あの、松島へ……」

「ええッ、マツシマ」

「まさか、今頃からその年でおや、買いに行くのんとちがうやろな」

「へえ、ちがいます」

巳之助があまり真正直な顔で答えるので、みんなドッと笑った。

「あの、わて松島の文楽座へ行きまんねん」

「ああ、そうかいな。文楽へな、文楽で何してんのや」

「へえ、人形遣いの弟子でおます」

「ほう、人形遣いの弟子かいな」

二、三人の顔が急にやわらかい笑顔になった。

「弟子は早いこと行かんならんねやな」

「へえ、いろいろ部屋の準備をしますので……」

「そうか、毎日毎日遠い処からえらいな。で、一体、誰の弟子や」

「へえ、人形遣いの玉助師匠の……」

「ほう、玉助の弟子か。おい、玉助の弟子やと」

「そうかいな、わしは玉助好きやで」

「知ってはりまんのんか」

「知ってるどころか、鼻^{ひいき}眞^まやで。玉助はな親玉の息子や、そらええ芸持とおるで」

「わいかて好きや。お前が弟子かいな、しっかりせいよ」

文楽の玉助の弟子だと知ってから魚屋たちは急に親しくなつてやさしくしてくれた。お前が頭巾を脱いで出遣^{でづか}いするようになったらひいきにしたる、とまで言う。巳之助は時間があるので身体が温まると丁寧にお辞儀をして焚火を離れて歩き出したが、心の中は今までになくぬくかった。芸人というものは自分が思っているよりもっと結構なものであった。師匠の名を言っただけで、何もわからぬ弟子の自分にも親切にしてくれるのだ。

巳之助は今までになかった明るいものが胸の中でもるような気がした。ひととき身体を温めたので足も軽い。当時「政府」といわれた大阪府庁をすぎ、外国人居留地川口町から松島に出る道と、堀江から千代崎橋に出る道とがある。長い道のつれづれに、巳之助は時々道を変えて歩くのだが、今日は堀江から千代崎橋に出た。千代崎橋が見えるところまで来ると、寝しずまる松島遊廓のぬれたような灯明りが艶に漂うのだが、それにも無関心な巳之助の足は早くなる。千代崎橋のほとりまで来て、

「渡れる、よかった」

と巳之助は思う。千代崎橋は「そろばん橋^{はしげた}」といわれていて、木津川の和船の造船所が造っている千石船や新造船が通過する時、中央の橋桁^{はしげた}を東西にはずすようになってゐる。桁が動くのでそろばん橋と呼ばれているが、その折りに出会うと橋が元通りになるまで三十分近くも待っていないくたはならない。巳之助も一度そんな時にあつて足踏みしながら待つて楽屋に入った時は眼の回るよう

な忙しさであったし、支度がおそい、念が入らぬ、と師匠に叱られたことがある。巳之助は大きな息をついて橋を渡る。松島文楽の黒い屋根が暁方近い闇の中に見えていた。

人形浄瑠璃の歴史は長い。操り浄瑠璃あやつの人形は平安時代の傀儡師くぐつしにまでさかのぼる。彼等はアジア大陸から渡来してきた漂泊の民で、人形を舞わせると共に、種々の芸を見せ、女は歌をうたい、客を慰めた、とある。それ以来、人形劇はいろいろと日本流に工夫され御所にも召され、將軍も観る、というほど流行したが、現在の三人遣いになったのは江戸時代の元禄の頃、竹本義太夫が、井上播磨掾の流れから一流を編みだし、貞享元年、大阪道頓堀に竹本座を創設し、現代の義太夫節の基礎を築いたのであった。現在、浄瑠璃節の事を義太夫ぎだうと言い、「女義太夫」などというのはそのためである。

江戸文化が爛熟期に入った元禄時代、近松門左衛門という劇作の巨峰を得て、約百三十編の新作を上演した。「出世景清」は近松門左衛門が竹本義太夫のために書下した最初の作品といわれ、この芝居で大評判をとったのである。その後、「出世景清」のような時代物に対して、「世話物」といわれる、一般町人の男女の恋、義理人情の世界の哀歓を扱った劇ができ、最初の「曽根崎心中」は大衆の胸にこたえ、大当りをとったのである。以後、「心中天網島」「心中宵庚申」「大経師昔暦」「女殺油地獄」等々、一般庶民の心をえぐり、人には見せぬ涙も劇場では堂々と流せた男、女もいた筈である。近松門左衛門だけではなく、近松半二や三好松洛等の作品もあって人形浄瑠璃は華やかに演じられ、もはや大衆にはなくてはならないものになってしまったのである。それは巳之助十



香

五歳の頃も同じことで、浄瑠璃と三味線と人形と、いわゆる三業さんごうの華やかな舞台から、ある時は自分の心を代弁してくれるような義理人情のかなしく美しい世界が見物の心をゆさぶるのであり、浄瑠璃に聞き惚れ、人形の動きに陶醉したのは明治になっても続いていた。

大阪の操り座は貞享、明和頃は、道頓堀に、竹本座と豊竹座があり、北堀江には明和の頃から堀江座ができたし、平野町の御霊神社内には明治十七年、文楽座ができた。（現代の古老なら御霊文楽座は知っているだろう）。博労町稻荷社内では文楽軒の芝居、彦六座、四ッ橋には元近松座があった。その場所は、現在、人形浄瑠璃を演じている道頓堀朝日座に移るまでの劇場であった。文楽座という名は、明治五年一月、松島遊廓内に、人形浄瑠璃一座が移転してきたとき、初めて名乗ったのに始る。現在は文楽、といえ人形浄瑠璃、となっているが、昔は人形浄瑠璃の一座は多くあった。それほど盛んであったのである。明治の終りから大正にかけては素人衆に好まれ、浄瑠璃の一つも語れぬと、料な場所には出られないくらいで、大商人達のたしなみの一つでもあったし、素人浄瑠璃の会も処々方々で行われていた。

明治十六年一月の松島文案の三業さんごうの棟梁とうりやうといえる紋下は、

竹本長登太夫

吉田玉造

であつて、淨瑠璃陣は竹本染太夫、竹本伴太夫、竹本越路太夫であり、三味線は豊沢団平、豊沢広助、人形には吉田玉造、吉田玉助、初代桐竹紋十郎、豊松東十郎など、三業が競いあつた豪華な陣容である。何も知らぬ無欲な少年、河村巳之助が弟子入りした松島文案座には、永遠に讃えられる三業の名人が揃っていたのであつた。（現在にも耳馴れた名のあるのは、格式を大切にして襲名という掟が現在まで守られているからである）。

豊沢団平は三味線界では不世出の鬼才といわれた。文政十一年、大阪生れ。二十八歳の若さで、やぐらした櫓下の長門太夫の相三味線を勤めた。明治十七年、松島文案を脱退して稲荷彦六座に移るが、常に「芸人は舞台で死ぬ」と弟子達に教え、本人も明治三十一年四月興行で大隅太夫の語る「志渡寺」を弾きながら脳溢血で倒れた。

写真の面影は細長い顔、きびしく迫った眉と眼ながら、どこかやさしい愁うれいを含んでいて、意志の強さを表わした大きな口が引締っている。

竹本越路太夫、即ち摂津大掾は、天保七年、大阪生れ。大隅太夫と共に明治期を代表する太夫であつて、大隅の情を語る渋さに対して、美声で濃艶な芸風は一世を風靡ふうびしたという。明治十六年四

月、紋下になって以来、三十年間、文楽座の中心となって活躍し、大正六年四月、八十二歳で没した。

写真で見ると「酒屋」「十種香」「先代萩」「中将姫」など、女の主役の義理人情こまやかな浄瑠璃を語った人らしく、繊細で美しい人である。

吉田玉造は文政十二年、道頓堀で生れ、二代目吉田辰五郎の内弟子となって修業した。明治期の人形遣いの代表であって「親玉」と敬まれ、恐れられていて、初代名女形遣い桐竹紋十郎と共にいつまでもその芸風を語り伝えられている。明治五年一月、人形遣いでは初めての紋下となり、明治三十八年、七十七歳で没するまで文楽のために尽したのである。

写真で見るとふくよかに丸い初老の顔である。眼元、口元、やさしいものを含んでいるが、この人に睨まれたら誰もが慄えあがった、という程である。少年巳之助は、この人の息子で父親以上と噂される玉助の許に弟子入りして、玉助にも玉造にも仕え、叱られ、撲られて教えられたのである。後年、芸術院会員、難波掾となる吉田文五郎の巳之助が松島文楽座で肩を揉んだりした頃の玉造は、五十五歳くらいであった。

巳之助は楽屋の狭い入口に駆け入る。

「お早よう、おっちゃん」

と門衛に声をかけて狭い階段を上がるうしろの方で「巳之さんか、お早よう」と寝ぼけた年寄り